

祈りの研究(3)

鵜丹谷 三千代

1. 序にかえて

祈りの底にあるべきものは、心の静寂を尋ね求めることでもなければ、神の感覚をたのしむことにあるのではない。

それは何よりもまず、超越せる神のみ前にひざまずく態度にある。ただ単に超越するだけでなく、私たちと無限に「かけはなれた」超越せる神、人間のすべてをアリののように踏みつぶしてしまったところで、その正義にも愛にも反することのない神、その神の恐るべき超越性の認識と、その超越せる神に「アッパ、父よ」と、呼びかけることができる驚くべき神との親近性とのパラドックスの中に、祈りの本質は隠されているのである。

ひざまずくとは、このパラドックスの十字路におかれた敬虔なる愛の姿である¹⁾。

2. イエスの祈り

イエスは、祈りの最上の師である。イエスは誰よりも祈りのすべてに知りつくした上で、弟子たちの求めに応じて、祈りの手本を示された(ルカ 11:1-4)。

ここにイエスが教えられる祈りのタイプが示されている。つまり自分のことからではなく、父なる神のことから始めよと言われる。自分の関心事ではなく、み国を求めよと言われる。「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう。」(マタイ 6:33)

イエスの祈りは、イエスの生涯がまさにそうであったように、本質的に父なる神を中心としたものである。実にイエスの生涯を占有したのは、父なる神であることを福音書は明白に描いている。イエスの食べ物、飲み物とは、父なる神のみ旨を果たすことであった(I コリント 10:31, ローマ 14:6)。

また、私たちが、父なる神のみ旨を行うならば、私たちはイエスの兄弟姉妹、母となるとイエスは言われた(マタイ 12:50, マルコ 3:35)。イエスは、私たちから、主よ主よと呼ばれることよりも、父なる神のみ旨を行わせることに関心を示された(マタイ 7:21)。そして、イエスはご自分がそうであったように、私たちの誰もが、父なる神を礼拝するようになることを願われたのである(ヨハネ 4:23)。

イエスの弟子たちは、「主よ、ヨハネがその弟子たちに教えたように、わたしたちにも祈ることを教えてください」(ルカ 11:1)と、イエスに直接導きを願ったのは、まことに賢明であった。祈りの道において、イエス以上の師はまたとないからである。そこで、彼らに言われた、「祈るときには、こう言いなさい」(ルカ 11:2)と、イエスはその模範を教示されたのである。

どのように祈ったらよいのか、その問いに対するまず第一の答えがこのように、イエスのもとに赴き、教えてくださいと願うことである。

祈りを習うとは、主イエスに願うことである。

そして、祈りは、まず父なる神のことから始めることである。これが、イエスの教えの第一である。どこにおいても、父なる神のみ旨が行われることである。

イエスは、私たちの必要のためにも祈れと言われる。私たちは、とかく私の必要事はすべて神にゆだねるという信仰姿勢が霊的だと考えがちであるが、それはイエスの教えられた「主の祈り」からは遠い。

私たちは、へりくだって、種々の必要があり、いろいろなものが要る事実を認めなければならない。イエスは、自分のために、こう求めよと言われたのである。日用の糧、霊的な力、罪のゆるしの三つである(ルカ 11:2-4, マタイ 6:11-13)。

イエスが弟子たちに教えられた祈りの中で、祈りとは、私たちに必要なものを願い求めること、私たちにあって善いものを願い求めることを教えられたのである。イエスが、父なる神について語られたところをルカによる福音書は、次のように記している。

「あなたがたのうちのだれかに、友人があるとして、その人のところへ真夜中に行き、『友よ、パンを三つ貸してください。友だちが旅先からわたしたちのところに着いたのですが、何も出すものがありませんから』と言った場合、彼は内から、『面倒をかけないでくれ。もう戸は締めてしまったし、子供たちもわたしと一緒に床にはいっているの、いま起きて何もあげるわけにはいかない』と言うであろう。しかし、よく聞きなさい、友人だからというのでは起きて与えないが、しきりに願うので、起き上がって必要なものを出してくれるであろう。そこでわたしはあなたがたに言う。求めよ、そうすれば、与えられるであろう。捜せ、そうすれば見いだすであろう。門をたたけ、そうすれば、あけてもらえるであろう。すべて求める者は得、捜す者は見だし、門をたたく者はあけてもらえるからである」(ルカ 11:5-10)。

求める者は、だれでもとイエスは言われる。そこには、聖者と罪びととの区別はない。もしか、しかしとかの但し書きもない。だれでも求める者は受ける。なかなか信じがたい言葉である。「あなたがたのうちで、父であるものはその子が魚を求めるのに、魚の代わりにへびを与えるだろうか。卵を求めるのに、さそりを与えるだろうか。このように、あなたがたは悪い者であっても、自分の子供には、良い贈り物を知っているとするれば、天の父はなおさら、求めて来る者に聖霊を下さらないことがあるだろうか」(ルカ 11:11-13)。

このように、祈りは私たちの一切の必要をかなえてくれるのである。祈りは、根本的に願い求めることである。祈りには力がある(ルカ 11:1-13, マルコ 11:22-26, マタイ 21:20-22, ルカ 18:1-8, ヨハネ 14:12-14, 15:7, 16:23-24, ヤコブ 1:5-8, 5:13-18, I

ヨハネ 3:22, 5:14-15, ペリピ 4:4-7, I テモテ 2:1)

3. キリストの御名によって

「わたしの名によって願うことは、何でもかなえてあげよう。父が子によって栄光をお受けになるためである。何事でもわたしの名によって願うならば、わたしはそれをかなえてあげよう」(ヨハネ 14:13-14)。

キリストは「わたしの名によって」という言葉を、ヨハネ 14:13-14 の他に、同 15:16, 同 16:23, 24, 26 において、6 回くり返している。キリストは、私たちの心が、容易に受け入れないことを、よく知っておられた。従って、「わたしの名によって」とくり返され、主の名は、あらゆるものがひざまづく力あるものであり、この名によるならばどんな祈りでも聞かれることを、私たちが真に信ずることを切望されたのである。「求めるものは何でも」という驚くべき言葉と、「わたしはそれをかなえてあげよう。父が与えて下さる」という神の約束との間には、「わたしの名によって」という一語があって、くさりのように結びつけている。わたしたちの「求め」と、御父が「与えられること」とはいずれも、キリストの名によるのである。祈りのすべては、「わたしの名によって」の一語をどう理解するかにかかっている。

「名」とは、どういうものであるか。私たちは「名」によって、物の全存在を思い浮かべる。その「名」が、その特性を示してくれる。

神の聖名は、神の性質と栄光の全部を表す。同じようにキリストの御名は、キリストのすべての性質、人格、事業、思い、また霊を意味する。キリストの名によって求めるということは、キリストと一体になって祈ることである。

キリストの名によって、すなわちキリストと一体になって、キリストの性質と霊にあずかって祈ることがわかれば、求めることは必ず答えられるという原則に、不変の必然性と確実性があることもわかってくる。

「その日には、あなたがたはわたしの名によって求めるであろう」(ヨハネ 16:26)——その

日とは、聖霊によって、キリストが弟子たちのうちに来て住まわれた日であると知るならば「わたしの名によってねがうことはなんでもかなえてあげる」という途方もなく大きな約束も真実なひびきをもっ迫ってくる。

4. 聖霊と祈りの関係（使徒行伝から）

「このように、あなたがたは悪い者であつても、自分の子供には、良い贈り物をすることを知っているとすれば、天の父はなおさら、求めてくる者に聖霊を下さらないことがあろうか」（ルカ 11：13）。

キリストは、「求めよ、そうすれば、与えられるであろう」と、はっきりと言われた（ルカ 11：9）。神が与えられることと、私たちの要求とは、切り離すことのできない関係にある。キリストは、特に聖霊について、このことを言われたのである。地上の父が子にパンを与えるのと同じほど確実に、神は求める者に聖霊を与えてくださるというのである。すなわち、あらゆる御霊の働きは、一大法則に支配されている。それは、神は与えなければならないし、私たちは求めねばならないということである。ペンテコステにおいて、聖霊が尽きざる流れとなって注ぎ出されたのは、祈りの答えであつた（使徒 2：1－4）。

御霊が信ずる者の心に注がれること、また御霊が腹から生ける水の川となって流れ出るのは、常に「求めよ、そうすれば、与えられるであろう」との法則によるのである。

すなわち、使徒行伝 1 章 14 節の「彼らはみな、……心を合わせて、ひたすら祈りをしていた」をもって始まり、2 章になると「五旬節の日がきて、みんなの者が一緒に集まっていると、……一同は聖霊に満たされ……その日、仲間に加わったものが 3、4 人ほどあつた」とある。

ここにおいて、贖いの大業が成就したのである。キリストは、聖霊の降臨を約束された。しかし、それだけでは不十分であつた。それは、10 日間にわたる弟子たちの、一致した祈りであつた。彼らの心をととのえたもの、天の窓を開いたもの、約束の賜物と呼ばいだしたもの、それは熱心かつ継続的な祈りであつたのだ。キリ

ストが神の右につかれることなしには、御霊の力は与えられなかった。しかしそれと同じように、王座の下にひれふす弟子たちがなかったならば、その降臨はなかったのである。他のいかなるものが地上にあらうと、御霊の力だけは、祈りによって天から呼びくだされねばならないという世々にわたる不変の法則が、教会誕生のこの時、確かにすえられたのである。信仰をもって継続的に祈る祈りの量が、教会内に働かれる御霊の量であるといえよう。

第 4 章で、このことがどのようにして確かめられているかをみたい。

ペテロとヨハネは議会に引き出されておびやかされた。彼らは、言われたことを兄弟たちのところにもどって全部報告した。「一同は、口をそろえて、神にむかい声をあげていい『主よ、いま、……僕たちに、思い切って大胆に御言葉を語らせて下さい』と祈った。彼らが祈り終わると、その集まっていた場所が揺れ動き、一同は聖霊に満たされて、大胆に神の言を語り出した」とある。

祈りに従う家の震動、御霊の満たし、大胆に神の言葉を語る力、一同に加わった恵み、一致と愛の表われ、それはまるでペンテコステの再現であつた。なおそれには、教会の霊的生命の根底にあるものが祈りであるという事実を、消し得ないほど鮮明に教会の心に刻印した。神が御霊を与えられる量は、私たちの求めいかにかかっている。子のように求める者に対して、神は父のようにお与えになるのである。

第 6 章には、ギリシャ語を使うユダヤ人たちから、ヘブル語を使うユダヤ人たちに対して、自分たちのやもめらが日々の配給でおろそかにされがちだと、苦情が出たとき、使徒たちは人を選んで食卓係にしたと、記されている。使徒たちは「わたしたちは、もっぱら祈りと御言のご用に当たることにしよう」と、言っている。

ヤコブの手紙には、「父なる神のみまえに聖く汚れのない信心とは、困っている孤児や、やもめを見舞い」と、記されているが、このような仕事でさえも、彼らの召された本来のつとめ、すなわち専心祈ることと御言葉に仕えることと

の妨げになったのです。

この世と同じように、神の国においても、労働の分割は力となる。キリストのしもべは、御言葉に仕えるのと同様、祈りにも身をささげるよう選び分かつたれている。この原則に従うことこそ、教会の力と成功の秘訣なのである。使徒たちは、ペンテコステの前だけでなく、後にも祈りに身をささげたのであった。

第8章では、ペンテコステの賜物と祈りの関係をべつな角度からみている。ピリポはサマリヤにおいて、大きな祝福のうちに説教した。多くの人々が主を信じた。しかし聖霊は、だれにもまだ降らなかった。そこで、彼らが聖霊を受けるために、使徒たちはペテロとヨハネをつかわして、彼らのために祈らせた。このような祈りをする力は、説教以上の高度の賜物であった。

確かに、私たちが切に求めなければならない初代教会のすべての賜物のうち、祈りの賜物——信者の上に聖霊を呼びくだす祈りの賜物——ほど、必要なものはない。この力は、「わたしたちは、もっぱら祈り……に、あたることにしよう」と、言う人たちに与えられるのである。

カイザリヤのコルネリオ家では、聖霊がくだったため、祈りのわざと御霊との驚くべき関係についてのもう一つの証拠、すなわち、祈りに身をささげている人には何がもたらされるかということを見るのである。

ペテロは昼ごろ、祈ろうとして屋上に上がった。その時、彼は天が開けるのを見た。そして異邦人がきよめられる幻を見た。それと同時に、コルネリオが送った人の使者が来た。コルネリオは常に祈っていた人で、天の使から「あなたの祈りは聞きいれられた」と告げられた。

さて、ペテロは「彼らと一緒にいけ」と告げる御霊の声を聞いた。神のみこころを示され、カイザリヤへの導きを受け、祈りによってこのころの備えられた聞きての人たちと会うことのできたのは、祈っているペテロであった。

こうしたすべての祈りに答えて、全く予期以上の祝福が来たり、異邦人の上に聖霊が注がれたことは、決してふしぎなことではない。聖霊の教えと力とは、いつでも祈りに関連している

のである。

第13章に、祈りと断食をもって主に身をささげて五人の、アンテオケ人の名があげられている。彼らが祈りに身をささげたことは、無駄ではなかった。彼らが、祈りのうちに主に仕えている時、聖霊は彼らに会われ、神のご計画を新たに示された。神は彼らを召して、ご自身の同労者とされた。神はバルナバとサウロとを召して一つの事業に当たらせようとしておられた。彼らの任務と特権とは、祈りと断食によってふたりを選び分かち、「聖霊につかわされて出て行かせる」ことであった。

聖霊は、祈りの人に対して、神の業をなす権威と、御名を使う権威とをお与えになった。聖霊は、祈りのために与えられたのである。祈りは、御座の上なる王と、足もとにすわる教会とを結ぶくさりである。祈りは、祈りに答えてくださる聖霊によって、人が天の力を持つようになるためのくさりなのである。

以上のように、聖霊と祈りの関係を、使徒行伝からみてきたが、そこには明らかに二大真理が立っていることを知らされるのである。すなわち、多くの祈りのあるところに、多くの御霊があること、また多く御霊のあるところに更に増し加わる祈りがあるということである。

この二つの原理の関係は、非常にはっきりしている。したがって、祈りに答えて御霊が与えられるとき、それは常に、聖霊の天的力と恵みとの、より完全な啓示と、交わりとを受けさせるため、更に多くの祈りを呼び起こさないではない。

もし、初代教会があのように繁栄し、勝利を得たのが、祈りによってであったとするならば現在の教会の唯一の必要も、またそうではないだろうか。

5. 聖テレジアの祈り

聖テレジア²⁾はつねづね、知性によらず心で祈りなさいと説いてやまなかった。彼女は「祈るとき私は考えることができない。考えをめぐらすと、すぐにも気が散ってしまうからです」と述べている。それで彼女は祈るとき、かならず

何かの本を手元に置いたという。気が散ると、すぐにその本に頼ることができるためであった。だが、聖テレジアは、知性がすぐにさまよい出るという自分のこうした傾向を、神からの祝福であると思なしていた。心で祈るしかほかに道がなかったからである。彼女は神について思いめぐらすのではなく、神を愛しながら祈りの時を過ごした。祈りの道に大きく進歩できたのは、まさにこれのためであったと彼女は考えていた。

聖テレジアはその著『靈魂の城』で、こう言っている。「祈りや観想の道で長足の進歩を遂げたいと望むなら、考えてはなりません。たくさん愛しなさい。肝要なのは、これだけです。」

また、『完徳の道』では、次のように記している。「考えることにこそすべての礎があると思っている人が、なんと多いことでしょう。考えることができないと、時間を浪費していると感じるのです。」

祈りの実践にあたり、人は心を耕すよりもずっと熱心に知性を育もうとする。祈るにあたり、確かに知性の働きの欠かせない。神のみ言葉を理解し、神が私に対して何を言われるかを聞くために、知性は大切な働きを担う。しかし、真理とか省察によって占拠されてしまい、それだけで祈りが終わるなら、私たちは神に養われ強められることはない。神に触れようとするなら心で迫らなければならない。知性だけでは把握しきれない神についての真理、すなわち知恵といったものを理解するには、心によるしか方途はないことを、聖テレジアは自らの体験から語っているのである。

だから祈るときには、気持ちを鎮め、考えることから身を引き、神を愛することに心を向け、愛情をもって身近にいてくださる主に安らぎ、主に信頼し、礼拝し、主と一つに結ばれることを志すことである。

私たちの祈りが、知性の領域から、心の領域に移るなら、それこそ祈りの道に大きく進んだことのしるしであると、教えているのは聖テレジアである。

6. ベネディクト³⁾の祈り

ベネディクトの祈りは、カトリック教会で幾世紀にもわたって広く行われたものである。この祈りを普及させ、練りあげたのは聖ベネディクトであった。この祈りは伝統的に三つの部分に区分される。

- ① レクチオ（読書）
- ② メディタチオ（黙想）
- ③ オラチオ（祈り）

この伝統的な祈りの要領は、次のように行う。神のみ前に出て、しばらく気持ちを静める。ついで、何かの書物をひもとき、祈りの材料をくみとる。心に訴えてくるものを覚え、魅了されるような一語、一句、一文に出会うまで読書が続ける。ピンとくる箇所に出会ったら、読書を中断する。この第一段階が終わると、第二段階にさしかかる。すなわち、黙想に入るのである。

さて、この読書にどのような書物を選ぶかであるが、思索より祈りを育むものならば、どのような本でもよい。なかんずくふさわしいのは聖書である。まだ読んだことがなく、先へ先へと進ませるような書物は、この際不適当である。心を祈りへと目覚めさせるのが読書のねらいであって、知性を好奇心へ駆りたてることではないからである。

次に、黙想であるが、知性ではなく口で行う。詩篇作者は、主のおきてについて黙想するのを愛好した(詩篇1篇)。神のみ言葉は、蜜よりも甘く、知恵に富んでいる。また、わが足のともしび、わが道の光ですと、黙想して歌っている(詩篇119:103-105)。

詩篇作者がこのように言うとき、知性の働きから主のおきてを省察しているのではない。詩篇1篇にみるように、昼も夜も主のおきてをくりかえし口で唱え、黙想しているのである。

しばらくこのようにあるならば、これらの言葉を十分に味わったと言える。そうなったら、黙想を中断し、第三段階の祈りへと移行する。

第三段階の祈りは、次の要領で行う。

まず、主のみ前にいる。その主に向かって語りかけるか、あるいは主のみ前で安らかな沈黙

を保っているかして祈る。気が散って祈りがむずかしくなったら、聖書を取って読書をはじめ。読みすすんだ心に響く箇所にはゆきあたら、それに留まる。

「祈りは簡潔にして純粹であるのがよい」とベネディクトは言っている。それは、黙想、祈りにあてる時間について言っているのではない。ベネディクトの祈りの第三段階にあたる祈りは、できるかぎり純粹に、すなわち精神の集中のうちに保たれるべきだ、というのである。

聖テレジアは、知性の領域から心の領域へと移行してこそ、祈りへの進展があることを説いたが、ベネディクトもまた、その目的にかなうもっともすぐれた方法を示されたのである。しかも、ベネディクトの祈りは、頭にも祈りに参加する余地を残しているのであって、これが気が散ることを防ぐ一助になっている。それでいて同時に、祈りを推論や省察から遠くへと連れ出し、単純さと感情の領域へ導き入れるのである。

7. ヨハネ・クリゾストムス⁴⁾の祈り

クリゾストムスの祈りは、今日絶えて顧みられなくなっているが、きわめて明解なものである。大要は次のとおりである。

祈るにあたって、まず神のみ前にいることを意識する。それから主の祈りのような型の定まった祈りを唱える。その際、唱える言葉と、言葉を向ける相手とに精神を集中する。

主の祈りを唱えるとする。はじめてから終わりまで完全に精神を集中させて唱えてみる。

天にましますわれらの父よ
ねがわくはみ名をあがめさせたまえ
み国を来らせたまえ
み心の天に成るごとく地にも成させたまえ
われらの日用の糧をあたえたまえ
われらに罪をおかす者を
われらが許すごとく
われらの罪をも許したまえ
われらを試みにあわせず
悪より救い出したまえ
国と力と栄えとは

かぎりなく汝のものなればなり アーメン。

以上、唱えながら、ひとつひとつの言葉の意味を思い、ゆっくりと唱えていく。

どこかで気が散ったならば、逸脱したその語なり句なりにもどって唱え直す。必要なら幾度も繰り返す、完全な精神の集中のうちに唱えられるまで繰り返す。

数多くの聖人たちが祈るときに用いた方法はまさにこれであった。彼らはこの方法だけで祈りの道に驚くべき進歩を遂げたのであった。

主の祈りをこのように唱え終わったら、二度三度と反覆する。あるいは別の祈りを選んでもよい。

こういう祈りは、既成品だから個人的祈りたりえない、という意見もあろうかと思う。だがそうであろうか。私たちは、語句は全く同じ主の祈りを、誰ひとり、主の祈りを同じように唱えるわけではないからである。

たとえば、主の祈りを唱えるとき、この祈りの言葉は唱える人の心と知性に入り、しみこんでいく。祈りの言葉が、祈る人を形造り、祈り手が施す言葉の彩色が、決定的な個人の祈りとなって、神のみもとへ昇っていくからである。こういうわけで、型の定まった祈りが、個人的なものでないとは言えないのではなからうか。

8. 結びにかえての祈り

求めよ、そうすれば、与えられるであろう。捜せ、そうすれば、見いだすであろう。門をたたけ、そうすれば、あけてもらえるであろう。(マタイ7:7)

われらの祈りに答え給う父よ⁵⁾。あなたはこのわたしたちを、独子の血の代価を払ってまで買い取ってくださいました(Ⅰコリント6:20)。自分自身にしばしば絶望し、自分を粗末に扱っているわたしたちを、あなたがこれほどまでも大切に考えてくださっていますことを心から感謝いたします。

「求めよ、捜せ、門をたたけ」とのみ言葉の中には、「なぜ、本気で祈ろうとしないのか」との、あなたの激しい呼びかけがあります。「苦しい時の神頼み」がなぜ悪いのかと、神よ、あな

たのほうから言われるのです。

わたしたちは、ほんとうにあなたを信じていたのでしょうか。会堂司のヤイロでも、悪霊に苦しむ娘の救いを求めたカナンの女でも、なりふりかまわなくなった苦境の中でこそ、ほんとうにあなたにすがりつき、あなたに出会うことができました。「求めよ、そうすれば与えられる」のです。あなたは、わたしたちの真の父でいまし給うのですから。アーメン。

注

1) 『祈り』奥村一郎 女子パウロ会

2) Teresid 1515, 3, 28-1582, 10, 4, スペインの修道女、改革(跣足)カルメル会創始者、神秘思想家、聖人。〈イエズスのテレジア〉、〈スペインのテレジア〉とも呼ばれる。アピラの商人の家に生まれる。少女の頃に母を失い、心の痛みのあまり、聖母マリアに母となってくれるよう祈った。1535年同地のカルメル会に入会、はじめは病気に悩まされ、修道生活も当時の風潮に流れてゆるみがちであったため苦しんだ。しかし55年真の完徳に目覚め、この頃から種々の神秘的体験(特に脱魂)が始まり、人々の無理解と内的な苦しみの試練の中で新しい道を模索。62年周囲からの激しい反対の中に、神父D. バニエスらの後押しで、十数人の修道女たちとアピラに〈聖ヨゼフ(サン・ホセ)修道院〉を設立、原始会則に帰って清貧・禁欲・祈りの生活に専心した。小さく貧しくとも、院内はしばしば明るい笑声に満たされ、テレサ自身もよく料理番に立った。この頃仲間の修道女たちのために『完徳の道』1565、カルメル会訳、1952)を執筆、神秘的体験を述べた『自叙伝』1565、東京女子のカルメル会訳、1960)も完成した。67年よりカルメル会総長から彼女の改革は公認され、旧カルメル会との間の困難な問題も解決、十字架のヨハネ(ホアン)の協力も得て、各地に新修道会を設立、活動は多忙・困難を極めたが、明朗にこれに立ち向かい、女子17、男子15の修道院が作られた。この活動の中にも彼女の神秘的な生活は深まり、77年には主著『靈魂の城』(カルメル会訳、1966→)を執筆、人間の魂という城の一番奥の部屋(水晶宮)に住まわれる神へと祈りによって結ばれてゆく魂の道程を叙述した。82年ブルゴスに修道院を完成してアルバで没した。書簡、詩集その他の著作も残した。1622年聖人に、1970年には、シェーナのカタリーナと共に女性としてはただ2人の〈教会博士〉に挙げられた。祝日は10月15日。

3) Benedetto 480頃-547/550、西洋的修道院制の確立者。ヨーロッパの守護聖人。イタリア中部のヌルシア生まれ。497年ローマへ行き、修辭学を学ぶが、学問が頹廃し学生が墮落しているのを見て、そこを去り、スピアコへ身を退ける。ここで隠修士ロマーヌスに会い、修道士となり、洞窟で禁欲生活を送る。名声が広まり多くの人々が彼のもとに集まった。近くの修道院(ヴィコヴァロ)の院長になるよう要請される(510)。厳しい戒律を実施したため、修道士たちの反感をかい、毒酒を盛られたが危機を脱し、再びスピアコに帰り、弟子たちのためにこの地方に12の修道院を建てた。伝統を重んずる司祭のフローレンティウスらの嫉妬のため、ナポリの近くのモンテ・カッシーノへ移り、ギリシアのアポロ神殿の立っていた場所に新しい修道院を建てた(529頃)。ここでの修道生活の実践にもとづき作られたのが73章からなる『ベネディクトゥス会則』で、西方修道制の歴史で重要な役割を果たした。この戒律は彼以前の東方における禁欲生活の伝統と西方における修道規則をもとにまとめられている。修道士の生き方、祈り、礼拝、懲罰、修道院の運営などに関し、細かに述べられており、西洋中世の修道院制度の基本とみなされた。祝日は西方教会では3月21日、7月11日。東方教会では3月14日。

4) Chrysostomus Joannes (St.)

コンスタンティノープルの総大司教、教会博士、354年頃シリアのアンチオキアに生れ、407年9月14日没。教父でありまたギリシア教会最大の説教家としてその大雄弁のために七世紀以来「金口」(Chrysostomus)と称せられる。時代的には四世紀のギリシア教会の古典的神学者の最後の者で、また同時にその知的所産の総括者である。後世のギリシア教会(またロシア教会)の神学は彼を仲介者として初代教会の遺産を敬称するを得たのである。彼より一代程おくれて出たアレキサンドリアのキリルスと同じく彼もまた東方のアウグスチヌスと称し得る。彼の生涯と著作とは東方の神学の成立上、逸すべからざる影響を及ぼしているのである。金口ヨハネスは古代末期の世界的大都会たるアンチオキアのギリシア人の家に生れ、そこで有名な修辭学者リバニウスの下に学びヘレニズム的教養を身につけたのである。受洗後数年修道院生活に入り、次に助祭、司祭として孫にその見事な説教によってアンチオキアに一大反響を喚起した。彼は他のギリシア教父の何人よりも著作多く、この点でアウグスチヌスにのみ比較され得る。彼の修徳書で、有名な『司祭職に就いて』及び、当時問題となった修徳神学上の他の問題に関する

ものは、彼の修道院生活の頃の著作である。その中であつては、彼は同時代のヒエロニムスと同様、カトリック的解答を与えているのである。

- 5) 『われらの祈り』日本基督教出版局編
日本基督教団出版局

参考図書

1. 『CONTACT WITH GOD Retreat Conferences』Anthony de Mello 女子パウロ会
2. 『祈りと生活』プラチド・イバニエス, 中央出版社
3. 『東洋の瞑想とキリスト者の祈り』アントニー・デ・メロ著 裏辻洋二訳 女子パウロ会

4. 『瞑想について』門脇佳吉編 創元社
5. 『とりなしの祈り』アンドリュー・マーレー著 いのちのことば社
6. 『イエズスの聖テレジア自叙伝』女子跣足カルメル会訳 中央出版社
7. 『靈操』聖イグナチオ・デ・ロヨラ著 ホセ・ミゲル・バラ訳 新世社
8. 『靈魂の城』イエズスの聖テレジア著 東京女子カルメル会訳 ドン・ボスコ社
9. 『キリスト教人名辞典』
10. 『聖書』口語訳